

歴史ある高野山で 新しいニーズに対応する

Needs

【高野山ゲストハウス Kokuu / 高井 良知】

高野山に滞在するための新しい形態のゲストハウス。宿泊者の多くは欧米からの旅行者だという。経営する高井良知さんは祖父や父、兄共に僧侶という家庭に生まれ、高野山で育った。「歴史ある宿坊に泊まることは、高野山を身近に感じられ素晴らしい。しかしそれ以外の選択肢があってもいいのでは？」とインドを旅してふと思い立ったという。どことなく西洋風の神殿を連想させながら、原始的な和の雰囲気を感じる室内。歴史や伝統をリスペクトしつつ、今後さらに増加する外国人観光客のニーズに対応している形態のひとつであり、今後の新しいフォーマットでもある。

①チェックインの際にはできるだけ、地図を見ながら高野山や次の目的地の説明をするようにしているという。「土地勘がないことで無理なプランを立てているゲストも多い。だから必ず次の旅程を尋ねるようにしています」と高井さん。そういった親密な関係づくりがリピーターを呼び寄せている。 ②天井から差し込む光と通り抜ける風。コンパクトだからこそ高野山の空気感を身近に感じられる。 ③周囲の風景に溶け込むシンプルかつクールなデザインの外観。

【ゲストハウスKokuu】住所 / 伊都郡高野町高野山49-43 電話 / 0736-26-7216
http://koyasanguesthouse.com



雄大な自然と悠久の歴史、
温暖な気候と穏やかな日差し。
新鮮な海と山の幸に恵まれ
世界からの玄関口、
関西国際空港にも近い和歌山。
しかし和歌山の魅力は
それだけではない。
世界から人々を呼び寄せる
センスとアイデアに満ちた
仕掛人たちに触れてみた。

世界から 多くの人が 訪れる理由



今年5月、農業体験等を行ったマレーシアの修学旅行生たち。



「受入をきっかけに英会話を習い始めた人もいますよ(笑)。数年前に民泊した子どもが家族を連れて来たのは嬉しかったですね」と庄田会長。大変な部分もあるが、多くの若い人たちと時間を共有できることが楽しいという。取材当日も農業を軸とした新しいビジネスの可能性として、メディアが取材にきていた。(ピンクの法被を着ているのが庄田会長)

【いなみかえるの宿事務所】
住所 / 日高郡印南町印南原4931
電話 / 0738-20-4232
https://kaerunoyado.com/

グリーンツーリズムから 和歌山の未来を見る

Future

【いなみかえるの宿 / 庄田 登紀美】

いなみかえるの宿は、印南町の主要産業である農業に観光要素を加えたグリーンツーリズムを実践し、地域の活性化を図ることを目的に設立された農家民泊受入団体である。2011年に設立以来、海外からの22校をはじめ、国内外1300人を超す子どもたちを受け入れる。伝統的な遊びや農業関連の体験から、日常生活を共に経験する家族的な触れ合いを大切にしている。「理想は、彼らが家族を連れて和歌山に里帰り、するような気持ちで再び観光で訪れてもらうこと」と会長の庄田登紀美さんは夢を語る。和歌山の未来を予見させる新しい取組のひとつである。

Reason of Wakayama



戦略的な情報発信で 和歌山を世界に売り込む

Strategy

【田辺市熊野ツーリズムビューロー / ブラッド トウル】

熊野が「ナショナルジオグラフィック」の表紙を飾り、ガイドブック「ロンリープラネット」やCNNをはじめとする多くの海外メディアが高野熊野の特集を組む。そのきっかけを作ったともいえるのが、田辺市熊野ツーリズムビューロー プロモーション事業部長のブラッド トウルさん。現地を案内しながら、掲載しやすいように資料を揃えるなど、海外メディアに対する長年の「気の利いたプロモーション」の結果といえる。「熊野は田舎ですが、今はもう世界と繋がっています。受入側の体制も整いました。和歌山はこれからますます、世界から注目を集める魅力的な場所になると思っています。」

①2013年に新しくオープンした熊野の旅の拠点である田辺市熊野ツーリズムビューロー。カナダ生まれのブラッドさんは、ビューローの立ち上げから携わっている。 ②年間数えきれないほど海外からのプレスツアーをアテンドするブラッドさん。 ③フランスの機内誌など多くの旅行誌で「高野熊野」の特集が組まれているのも、優れたメディア対応の結果といえる。

【田辺市熊野ツーリズムビューロー】
住所 / 田辺市湊727-2 電話 / 0739-26-9025 http://www.tb-kumano.jp